

【この手で触れて】

作・藤田ヒロシ

○キャスト

私……………

父……………

友人……………

カップラーメンにお湯を注ぐ私。タイマーをセットする。

私 1974年・昭和49年8月30日午後0時45分、東京都千代田区丸の内で時限式爆弾が炸裂した。東アジア反日武装戦線「狼」による『三菱重工爆破事件』だ。その約3時間後、214キロ離れた静岡県引佐郡細江町氣賀で私が生まれた。

私 最初の合図は29日の午後9時半。素直に生まれていたら誕生は日付を越えなかったかも知れないが、何を思ったか母の中から出るのにそこから18時間もかかった。まるで決行日を二転三転させた「狼」の迷走ぶりの様で……と、言うのは流石に強引だ。彼らは最初に定めた9月1日が日曜日だったから平日に変えたに過ぎないし、私は何かを選べる立場になかった。死者8人、負傷376人を出したテロ事件と3060グラムの新しい命の誕生。この二つの出来事に繋がりは無い。飽きる程に繰り返されて来たありふれた景色の一つだ。

タイマーを確認する。

私 ん？いや「二つ」か……まあ、どちらにしろ私の人生もありふれた景色に溢れ、改めて話をした所で、皆さんにとってもありふれた景色の一つでしかない事でしょう。

待ちきれない様にタイマーを手にウロウロと歩きまわる。

私 でも、まあ、でもいいじゃないですか。たまにはそんな話にもお付き合い下さい。独りぼっちで寂しんです。

タイマーが鳴る。

急ぎ蓋を開け、カップラーメンを食べ始める私。だが、右手で持った箸を上手く使えない。やっと取れたのが数本の麺だ。それを口に運ぶと、箸を左手に持ち替える。

私 この世には右と左がある。

今度は何の不自由もなく麺を取り、口に運ぶ。続けて運ぼうとするが、慌てて箸を置く。

私 ごめんなさい！「お箸は右」「右はお箸を持つ方」です。はい。

と、箸を右手に持ちかえ、食べようとするが上手くいかない。自然と左手が出て来る。左手を自分の腿の下に挟み込んで、右手を使って窮屈そうに食べる。

父 お前が左の方が使いやすいのはわかる。出来る事ならそのままにし

てあげたいが、この国の文化や慣習はそれを良しとはしない。配膳も盛り付けもそう出来ている。大人になって何処で誰と食事しても恥ずかしくないように、今ならまだ間に合う。「お箸は右」「右はお箸を持つ方」だ。

窮屈そうに食べる私。

父 私はお前の為に言っているんだ。わかるな？

私 「お箸は右」「右はお箸を持つ方」……それには当てはまらない10人に1人の存在として生まれた私。なにかと「左」に縁がある。「演劇」をやっているのもその一つ――

父 おいしいか？

食べ続ける私。

私 思うように動かない手で食べる食事がおいしいわけがない。この世には右と左がある……のではなく、右か左かがあるだけだ。

と、スープを飲む私。

父 食事はおいしく、楽しくがいいよな。余計な事を考えることなく、今ならまだ間に合う。「お箸は右」「右はお箸を持つ方」だ。

右手で箸を持ち、勢いよく食べる私。苦しそうに食べ続ける。

友人 あれ？お箸は右？鉛筆は左だろ？器用だな。

私 「器用」？

友人 だって両方使えるってことだろ？僕なんて……

と、箸を左で持ち、食べようとしますが上手くいかない。

友人 全然無理だよ。スゴいな。

私 「スゴイ」？

友人 だって左でも箸使えるだろ？

私 え？

友人 使えないの？

私 ずっと使っていないから……

友人 使えるって。やってみな。

左手で箸を握る私。そして、食べようとする。上手くないかない。

友人
え？真剣にやってる？（噴き出して）面白いな……っていうか変わってるな。

私
「変わってる」？

友人
普通、利き手なら箸も鉛筆も使えるだろ？

私
……そうだね。

私
と、箸を置く私。

私
鉛筆は左、箸は右、左投げ左打ち、パソコンのマウスは右でクリッピングパスも出来る。包丁は基本左だがカツラムキは右でないと出来ない。ギターは右で、自慰行為も右だ。この世には右と左がある……のではなく、右か左があるだけだが……それは自由意思では選べない。

箸を右か左かで迷い、結局持てない私。

私
この国の文化や慣習、恥ずかしくないように……その言葉が私にとってどんな意味を持ち、何を与え、何を奪うのか、想像することなく、あまりにも無抵抗だった。

と、その手のひらを見つめる。

父
何をごちゃごちゃ言っている。単純明快な事をぐちゃぐちゃとこねまわして、複雑化して、自ら迷い道に進んで、悦に浸る。楽しいか？気持ちいいか？お前のマスターベーションなんて誰も興味はないし、不快だ。

私
（父を睨む）

父
なあ、なぜ拘る？右だろうが左だろうが誰も興味はない。使えるならそれでいいだろ。

私
（父を睨む）

父
さ、とっと食べて片づけろ。

私
（立ち尽くす）

父
食べないなら片づけろ。

カップラーメンと箸を手にする私。

私 (小声で)なら放っておいてくれ。(手が震え出し)放っておいてくれればよかったじゃないか。アンタが食卓に居るのは苦痛だった。アンタのいない食卓こそが私の食事だった。なあ、知っているか? こうして左手を腿に挟んで片手で食事をする。(椅子に座り再現し)これだ。アンタはこれを行儀が悪いと言い、こう続けた。「左利きのくせになぜ左手を使わないんだ」ってね。

と、立ち上がり左手を見つめ、

私 自分でも不思議だったよ。でも、ただの癖に理由なんてないとも思っていた。人ってさ、忘れる事が出来るんだよ。スゴイよな。でも無かった事には出来ないんだ。

と、椅子に座り右で箸を持つ。食べようとするが上手くいかない。自然と左手が出て来る。

私 お箸、マウス、カツラムギ、自慰行為……右で出来る事が増えようとも私は――

左手!

私 ごめんなさい!

と、左手を引っ込める。しかし、右手では上手くいかない。再び左手が出て来る。

父 左手!

私 ごめんなさい!

と、左手を引っ込める。

父 お前が左の方が使いやすいのはわかる。出来る事ならそのままにしてあげたいが、この国の文化や慣習はそれを良しとはしない。配膳も盛り付けもそう――

私 「お箸は右」「右はお箸を持つ方」「お箸は右」「右はお箸を持つ方」「お箸は右」「右はお箸を持つ方」……左は駄目、左は駄目、左は駄目、左は駄目、左は駄目、左は駄目……

と、左手を見つめた後、腿の下に挟む。その姿勢で食べようとする。左手が出そうになると腿で強く押し付ける。

私 左は駄目、左は駄目、左は恥ずかしい、左は恥ずかしい!

と、カップラーメンを食べ切る。

私 この手は私にいろんな事を教えてくれた。同じである事の大切さ、
そうであると言うだけで得られる安心。この国の文化や慣習。

右の者 ハサミって使えるの？両方使えるって便利だよ。疲れたら逆があるもんね。怪我しても困らないもんね。変わった人多いよね。天才がね。凡人の私たちと違って右脳を刺激しているからかな。なんかカッコイイよね。っていうかズルイ。スポーツとかね。私も左利きに生まれたかったなあ。きつとレギュラーになれたのに！

私 同じではない者へ好奇と無知。(小さく笑い出し)「左なんだ」……
右には特段何もないが、左はそれだけで特記事項だが、私自身も無
知なる者の一人ではしかなかった。10人に1人の存在。つまりは私
が目にしていたのはいつも9人の側だ。だから1人の側を目にした
時、例えそれが自分と同じだとしても、それまで目にしてきたモノ
とは違う景色が飛び込んでくる。「え？」……その違和感を始めて抱
いた時、それまで浴びて来た言葉と視線を完全に理解できた。誰も
がその目にしたモノだけがこの世なのだ。それは失望だったがそれ
だけでもない。こちら側から見える景色とは異なる景色がそちら側
にあるのだと知った。私は見えないモノを見たいと思った。知りた
いと思った。だからこの手を伸ばし、この先、この向こう、この裏
……(左手を伸ばし)私は左利きとして生まれ――

父 何をごちゃごちゃ言っている。単純明快な事をぐちゃぐちゃとこね
まわして、複雑化して、自ら迷い道に進んで、悦に浸る。楽しいか？
気持ちいいか？そうだろうな。マスターベーションが不快なんて笑
い話にもならないからな。でもそれだけだ。そんなモノに微塵の価
値もないんだぞ。10人に1人がなんだ。そんなモノは関係がない。
お前は結局ずっと1人でこねくり回し続けているだけなんだよ。そ
れを「演劇」と読んでいるだけなんだよ。いい加減に認めたら――

私 違う。
父 違う。
私 違う。

私 違う！私は10人に1人ではない。60億人に一人……でもない。
1／1だ。マイノリティーだろうがマジョリティーだろうが、その
生き様は1／1だ。右手を使える左利きを知っている。右を使えな
い左も、左を使える右も……それぞれに苦悩があり其処にいる事
を知っている。この世には右と左がある……のではなく、右か左か
あるだけだ。アナタの言葉にそう知ったけれど、今ならそれを抗う
事が出来る。この世には右と左があるんだよ。だから、その間もあ

私

り、両方だってあり、どちらでもないだってあるだ。

アナタが言う様にマスターベーションは快感だ。自分の思いだけで全うし果てる事が出来る。でもそれが最高なんて悲しい事だろ？一人が最高なんて……。だから私はアナタとさえ向き合う。遅いなんことはないだろ？（手を合わせ）ごちそうさま。

と、頭を下げ、空き容器と箸を手にして去る。

FIN